

## A Study on Place Attachment for Students (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-04-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 啓史, 野沢, 久美子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/425">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/425</a>

# 大学生の場所愛着に関する一考察 (2)

## A Study on Place Attachment for Students (2)

小西 啓史  
KONISHI, Hiroshi

野沢 久美子  
NOZAWA, Kumiko

### 要 約

武蔵野大学の学生292名（1年生108名、2年生68名、3年生89名、4年生27名）を対象に、彼らが通っている大学キャンパスに対する場所愛着（place attachment）について検討した。

評価の対象となったのは“武蔵野キャンパス”である。調査に用いられた尺度は、Williams & Vaske（2003）が開発したPlace Attachment Inventory（PAI）と大山・添田・大野（2007）、添田・大山・大野（2007）が開発した場所愛着評定尺度である。

大学で費やした時間（1週間の登校日数や1日の滞在時間）、大学への関わり（サークルへの所属、大学行事への企画参加）、大学周辺地域への関わり（大学周辺地域でのアルバイト）と2つの尺度との関連を調べた。

その結果、大学や大学周辺地域への関わりの多い学生と関わりの少ない学生の間で、2つの尺度の下位項目すべてにおいて差が認められた。すなわち、関わりの多い学生は少ない学生に比べ、PAIにおける場所依存性（place dependence）、場所同一性（place identity）が高く、また場所愛着評定尺度における郷土、所属、関与、肯定いずれも高かった。

これらの結果から、地域への関わりが大きいほど場所愛着が強くなることが明らかになった。

キーワード：場所愛着、大学生、キャンパス、環境心理学

### 問 題

環境心理学では、住み慣れた場所や行きつけの場所へ抱く好意的な感情を場所愛着（place attachment）と呼んでいる。場所愛着についてはこれまでも様々な定義がなされてきたが、代表的なものにLow & Altman（1992）のものがある。彼らは、場所愛着を

「人と場所との情緒的、感情的な結びつき」と定義した。

前報(小西・野沢, 2012)では、Williams & Vaske(2003)が開発したPlace Attachment Inventory (PAI) と大山・添田・大野(2007)、添田・大山・大野(2007)が開発した場所愛着評定尺度への回答結果を分析した。その結果、場所愛着の形成には時間的要因が大きく影響していることが明らかになった。これは、その場所で費やした時間の総数(その場所との関係の長さ)が場所愛着において重要な要因であることを示していた。この結果は、これまでの研究(Low & Altman, 1992; 榎野・添田・大野, 2001; Moore & Graefe, 1976; Relph, 1976; Tuan, 1977)を支持するものであった。

本研究では、キャンパスでの滞在時間、サークルなどへの所属、遊びやアルバイトなど、キャンパスおよびキャンパス周辺地域との関わり視点から場所愛着について検討することを目的とする。前報で収集したデータのうち、主に記述データを分析したものである。

調査対象となった武蔵野大学は、2012年4月より従来の武蔵野キャンパス(東京都西東京市)と新しく開設された有明キャンパス(東京都江東区)の2キャンパス体制に移行した。1年生は全員が武蔵野キャンパスで学び、9学部のうち4学部の学生は2年生から有明キャンパスで学ぶシステムを採用している。そのため、調査実施時に、対象となった学生のうち1年生は約3か月の武蔵野キャンパスへの通学のみで有明キャンパスへの通学経験はない。また、2、3、4年生はそれぞれの下位学年までは武蔵野キャンパスに通学していたが有明キャンパスへの通学経験は約3か月である。

## 方 法

**調査対象者:** 武蔵野大学学生292名が調査に協力した。内訳は、1年生108名(男子20名、女子88名)、2年生68名(男子17名、女子51名)、3年生89名(男子23名、女子66名)、4年生27名(男子5名、女子22名)であった。

- ① 1年生: 入学以来約3か月、武蔵野キャンパスにのみ通学している。
- ② 2年生: 1年間武蔵野キャンパスに通学し、有明キャンパスには約3か月の通学。
- ③ 3年生: 2年間武蔵野キャンパスに通学し、有明キャンパスには約3か月の通学。
- ④ 4年生: 3年間武蔵野キャンパスに通学し、有明キャンパスには約3か月の通学(ただし、多くの学生は授業がほとんどのないので、実質的な通学回数は少ない)。

**手続き:** 調査は2012年7月上旬、授業時間内に実施された。

(1) 用いられた尺度(Appendix参照)

### ① Place Attachment Inventory (PAI)

この尺度はplace dependenceとplace identityの2因子、それぞれ6項目から構成されている。英語の質問文を翻訳し、その後バックトランスレートを行い翻訳の適切性を確認した。以下の議論では、place dependenceをその場所への機能的依存感として「場所依存性」、place identityをその場所との情緒的一体感として「場所同一性」という用語を用いる。

### ② 場所愛着評定尺度

この尺度は、「郷土」5項目、「所属」4項目、「関与」2項目、「肯定」3項目の4因子、

14項目から構成されている。「郷土」は周辺地域への自分の地域としての感覚やくつろぎを、「所属」は周辺地域の一員としての自覚や連帯感を、「関与」は周辺地域に対する興味や積極的な心構えを、「肯定」は周辺地域への根づきをあらわしている。

(2) その他の質問 (Appendix 参照)

1週間の登校日数、1日の滞在時間、大学のサークルへの所属、大学行事への企画参加経験、大学周辺地域でのアルバイト経験などを聞いた。

1年生は武蔵野キャンパスおよびその周辺地域について、2年生以上は武蔵野、有明両キャンパスおよびその周辺地域について質問に答えた。2年生以上は現在有明キャンパスに通っているので、武蔵野キャンパスについての回答は回想法になる。

## 結 果 と 考 察

登校日数、滞在時間、大学のサークルへの所属、大学行事への企画参加経験、大学周辺地域でのアルバイト経験などの要因と、PAI、場所愛着評定尺度両尺度の関連を検討する。

調査を実施したのが新キャンパス開設から約3ヶ月であったため、対象となった2、3、4年生ともに有明キャンパス周辺地域でのアルバイト経験はほとんどなかった。そのため、今回の分析は武蔵野キャンパスについてのデータのみを対象とすることにした。

大学への1週間の登校日数は時間割の関係で、同一学年内ではほとんど差が見られなかった。同様にキャンパスでの滞在時間も、一部のサークル所属学生を除いてほとんど差が見られなかった。一方、大学のサークルへの所属や大学行事への企画参加、大学周辺地域でのアルバイトについては学生による違いがあった。そこで、サークルへの所属や大学行事への企画参加、周辺地域でのアルバイト、いずれかを経験した学生を「高関わり群」、いずれも経験がない学生を「低関わり群」とすると、1年生では高関わり群66名、低関わり群42名、2年生では高関わり群46名、低関わり群22名、3年生では高関わり群55名、低関わり群34名、4年生では高関わり群19名、低関わり群8名であった。そこで、これら2群をもとに分析することにした。

(1) 関わり の 程度 と PAI 得点

結果は Tab.1 に示した。

1年生：「場所依存性」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=2.178$   $df=646$   $p<.03$ )。「場所同一性」においても「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=2.994$   $df=646$   $p<.003$ )。

Table 1 キャンパスおよび周辺地域への関わりと PAI 得点

	1 年生		2 年生		3 年生		4 年生	
	D*	I**	D**	I**	D***	I***	D	I
高：関わり	2.561 (1.149)	2.51 (1.078)	2.786 (1.201)	2.953 (1.271)	2.806 (1.145)	3.136 (1.184)	2.719 (1.259)	3.281 (1.537)
低：関わり	2.365 (1.057)	2.262 (.946)	2.447 (1.315)	2.591 (1.348)	2.172 (.985)	2.431 (1.069)	2.5 (1.052)	2.896 (1.134)

( ) : SD \*\*\* $p<.001$ , \*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , †  $p<.10$

2年生：「場所依存性」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=2.588$   $df=406$   $p<.010$ )。「場所同一性」においても「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=2.639$   $df=406$   $p<.009$ )。

3年生：「場所依存性」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=6.554$   $df=532$   $p<.000$ )。「場所同一性」においても「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=6.936$   $df=532$   $p<.000$ )。

4年生：「場所依存性」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=1.061$   $df=160$   $n.s.$ )。「場所同一性」においても「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=1.563$   $df=160$   $n.s.$ )。

これらの結果から、大学やその周辺地域への関わりが多いと「場所依存性」も「場所同一性」も高くなることが明らかになった。4年生では関わりの多さによる違いは見られなかったが、学年間で比較すると「場所依存性」「場所同一性」いずれも下位学年よりも高いことから、たとえ大学行事やサークルへ参加しなくても、3年間通学することで大学への関わりが増え、結果、場所愛着は高くなったものと考えられる。

## (2) 関わりの程度と場所愛着評定尺度得点

結果はTab.2に示した。

1年生：「郷土」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=3.646$   $df=538$   $p<.000$ )。「所属」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=1.626$   $df=430$   $n.s.$ )。「関与」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=.968$   $df=214$   $n.s.$ )。「肯定」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で傾向差が認められた ( $t=1.831$   $df=322$   $p<.068$ )。

2年生：「郷土」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=3.730$   $df=338$   $p<.000$ )。「所属」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=.719$   $df=270$   $n.s.$ )。「関与」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=.788$   $df=134$   $n.s.$ )。「肯定」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=.920$   $df=202$   $n.s.$ )。

3年生：「郷土」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=6.572$   $df=443$   $p<.000$ )。「所属」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=3.841$   $df=354$   $p<.000$ )。「関与」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=2.504$   $df=176$   $p<.013$ )。「肯定」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差が認められた ( $t=4.394$   $df=265$   $p<.000$ )。

4年生：「郷土」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=.829$   $df=133$   $n.s.$ )。「所属」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で傾向差が認められた ( $t=1.811$   $df=106$   $p<.073$ )。「関与」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=.679$   $df=52$   $n.s.$ )。「肯定」において「高関わり群」と「低関わり群」の間で有意差は認められなかった ( $t=.669$   $df=79$   $n.s.$ )。

これらの結果から、大学やその周辺地域への関わりの少ない学生は多い学生より「郷土」意識が低いこと、また3年生は「郷土」「所属」「関与」「肯定」意識いずれにおいても関わりの多い学生の方が少ない学生より高いことが明らかになった。



Table 2-1 キャンパスおよび周辺地域への関わりと場所愛着評定尺度 (1年生)

	郷土***	所属	関与	肯定†
高：関わり	2.446 (1.116)	2.750 (1.081)	3.765 (1.003)	2.995 (1.164)
低：関わり	2.110 (.919)	2.571 (1.161)	3.631 (.979)	2.762 (1.039)

( ) : SD \*\*\*p<.001,\*\*p<.01,\*p<.05,†p<.10

Table 2-2 キャンパスおよび周辺地域への関わりと場所愛着評定尺度 (2年生)

	郷土***	所属	関与	肯定
高：関わり	2.857 (1.282)	2.826 (1.286)	4.109 (1.000)	3.210 (1.293)
低：関わり	2.309 (1.232)	2.705 (1.340)	3.955 (1.200)	3.030 (1.336)

( ) : SD \*\*\*p<.001,\*\*p<.01,\*p<.05,†p<.10

Table 2-3 キャンパスおよび周辺地域への関わりと場所愛着評定尺度 (3年生)

	郷土***	所属***	関与*	肯定***
高：関わり	3.153 (1.183)	3.255 (1.216)	4.282 (.910)	3.467 (1.150)
低：関わり	2.394 (1.183)	2.750 (1.185)	3.927 (.935)	2.824 (1.181)

( ) : SD \*\*\*p<.001,\*\*p<.01,\*p<.05,†p<.10

Table 2-4 キャンパスおよび周辺地域への関わりと場所愛着評定尺度 (4年生)

	郷土	所属†	関与	肯定
高：関わり	2.958 (1.383)	3.154 (1.317)	4.105 (1.247)	3.404 (1.280)
低：関わり	2.750 (1.193)	2.688 (.998)	3.875 (.806)	3.208 (.977)

( ) : SD \*\*\*p<.001,\*\*p<.01,\*p<.05,†p<.10

本研究では、武蔵野大学の学生たちが武蔵野キャンパスに対して抱えている場所愛着を、大学やその周辺地域との関わりからの視点から検討した。その結果、大学やその周辺地域への関わりが多い学生ほど場所依存性、場所同一性ともに高いこと、郷土、所属、関与、肯定が高いことが明らかになった。

引地・青木・大淵 (2007) は、自分が住んでいる地域に対する評価が高い住民ほど地域へのコミットメントが高いことを、鈴木・藤井 (2008) は、地域への愛着が高い人ほど、地域への活動に熱心であることを明らかにし、場所愛着と地域への関与度との間に関連があることを示している。今回の結果も、これを支持するものであった。

## 謝 辞

本調査を実施するにあたりご協力をいただいた、北岡和彦教授 (武蔵野大学人間科学部)、古家聡教授 (武蔵野大学教養教育部)、藤森和美教授 (武蔵野大学人間科学部) に感謝いたします。また、貴重な資料を提供いただいた立川公子非常勤講師 (武蔵野大学人間科学部) に感謝いたします。

### 引用文献

- 引地博之・青木俊明・大淵憲一（2007）地域に対する協力行動の要因：地域に対する評価と愛着の効果  
日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 456-457.
- 小西啓史・野沢久美子（2012）大学生の場所愛着に関する一考察 武蔵野大学人間科学研究所年報, 2,  
1-9.
- Low, S.M., & Altman I. (1992) Place attachment a conceptual inquiry. In I.Altman, & S.M.Low (Eds)  
Place attachment. Human behavior and environment. Advances in theory and research. Vol.12.  
New York: Plenum Press.
- 槇野光聰・添田昌志・大野隆造（2001）地域に関する情報が居住地への愛着形成に与える影響 日本建  
築学会大会学術講演梗概集（関東）, 769-770.
- Moore, R.L., & Graefe, A.R. (1994) Attachment to recreation setting: The case of rail-trail users.  
Leisure Sciences, 16, 17-31.
- 大山理香・添田昌志・大野隆造（2007）大学生のキャンパス周辺地域への愛着に関する研究 その2—  
場所への愛着の形成と地域における行動への影響— 日本建築学会大会梗概集（九州）1065-1066.
- Relph, E. (1976) Place and placelessness. London:Pion.
- 添田昌志・大山理香・大野隆造（2007）大学生のキャンパス周辺地域への愛着に関する研究 その1—  
アンケート調査及び場所への愛着の定義— 日本建築学会大会学術梗概集（九州）1063-1064.
- 鈴木春菜・藤井聡（2008）地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究 土木計画学研究研究・  
論文集, 25(2), 357-362.
- Tuan, Y.F. (1977) Space and place: The perspective of experience. Minneapolis:Universty of Minnesota  
Press.
- Williams, D.R., & Vaske, J.J. (2003) The measurement of place attachment: Validity and  
generalizability of a psychometric approach. Forest Science, 49, 830-840.

## Appendix

### 1. 調査に用いた2つの尺度

【問】「キャンパスおよびその周辺地域」に対するあなたの考えを答えて下さい。

〈Place Attachment Inventory (PAI)〉

1. 私はこの場所を、自分の一部のように感じている。(I)
2. ここは、私がやりたいことをするには最高の場所だ。(D)
3. ここは、私にとって特別な場所だ。(I)
4. ここより良い場所は他にはない。(D)
5. 私はこの場所に強い一体感をもっている。(I)
6. 私は他のどの場所にいるよりも、ここにいると多くの満足感を得ることができる。(D)
7. 私はこの場所に強い愛着を持っている。(I)
8. 他のどの場所でやるよりも、ここでやるのが私にとって重要だ。(D)
9. この場所にいると、自分がだれであるかを実感することができる。(I)
10. この場所でないと、私はそれをやることはできないだろう。(D)
11. ここは私にとって、とても意味のある場所だ。(I)
12. 他の場所と同じように、私はここでも楽しんでやることができるだろう。(D)

D : place dependence I : place identity

〈場所愛着評定尺度〉

1. この地域はただ大学に通うためだけの場所である (肯定)\*
2. 自分はこの地域の一員であると感じる。(所属)
3. 将来この地域が生活しやすくなればよいと思う。(所属)
4. 長い間この地域を離れていると寂しく感じる。(郷土)
5. 新聞やテレビでこの地域が出ていたら気になる。(関与)
6. 別の場所から戻ってくるとほっとする。(郷土)
7. 卒業してもこの地域を離れたくない。(郷土)
8. 同じ地域でも用のない場所には興味がない。(肯定)\*
9. この地域を知っている人がいるとうれしい。(関与)
10. 卒業してしまえば再びこの地域に遊びに来たいとは思わない。(肯定)\*
11. 「あなたの地域」といわれてもピンとこない。(郷土)\*
12. 地域の人は「同じ仲間だ」という感じがする。(所属)
13. この地域は第二の故郷だと思う。(郷土)
14. この地域の人たちと親しくつきあっていきたい。(所属)

\* 逆転項目



## 2. 調査に用いた質問項目の一部

【問】 あなたの日々の生活について教えてください。

1. 週に何日くらい登校していますか。あるいは、登校していましたか。
2. キャンパスでの滞在時間は、一日で平均するとどれくらいですか。あるいは、どれくらいでしたか。
3. 大学のサークルに所属していますか。あるいは、していましたか。
4. 大学行事（学園祭、オープンキャンパス、入試サポートなど）の企画に参加していますか。あるいは、参加したことがありますか。
5. 大学周辺でアルバイトをしていますか。あるいは、したことがありますか。